

# 学校教育目標の具現化をめざす教務運営の工夫・改善

～重点目標達成のための「P D C A」サイクルの評価活動を通して～

鞍手郡教育研究所

若宮町立若宮小学校

教頭 山田 伸子

## 1 主題の意味

(1) 「学校教育目標の具現化をめざす教務運営の工夫・改善」とは

全教職員が一丸となり、学校教育目標具現化のための具体的な道筋と方策をつくることである。

(2) 「重点目標達成のための『P D C A』

サイクルによる評価活動を通して」とは学校教育目標を具現化するために、校長の示す経営ビジョンに基づいて、緊急性、課題性のある評価項目を重点目標とし、学期または年間を教育活動の Plan (計画) Do (実施) Check (診断) Action (改善・公表) の段階でとらえ、段階に応じて評価、改善を行うことによって教師の意識改革を図り、学校改善や特色ある学校づくりをめざすものである。

## 2 研究の目標

学校教育目標の具現化をめざして、学校教育目標と児童の実態から明らかにされた教育課題や経営課題から重点目標を設定し、目標達成のための計画・実施・診断・改善の在り方を究明する。

## 3 研究仮説

本校(以後、前任校の宮田南小学校を指す)の学校教育目標と児童の実態から明らかにされた教育課題や経営課題から重点目標を設定し、学校評価システムに基づいて教育課程の計画・実施・診断を行い、明らかになった成果と課題から改善案を見出し、次の教育活動や学校・学年・学級の経営に生かしていけば、学校教育目標を具現化する教務運営が行えるであろう。

## 4 研究の内容

(1) 学校評価のシステムの確立

学校の教育目標の具現化のために、校長、教師、児童、保護者の評価を連動させ、学びを確かめることができるよう、計画的、組織

的、継続的に評価を進めていく必要がある。いつ、だれがどのような評価をするのかを年間計画に位置づけ、それに従って学校評価を行うことで、学校教育目標に取り組む視点や改善点を明らかにすることができる。また、保護者への公表を通して説明責任を果たすことができると思う。

(2) 重点目標と具体的な取り組みの視点の設定

平成15年度に行った標準学力検査では、国語科は - 1.5 ポイント、算数科は - 0.5 ポイント全国平均を下回っていた。そこで、本年度は「めざす児童像」の中の、「よく考え、すすんで学ぶ子ども」(自己教育力の育成)を重点目標に設定し、確かな学力をつけるために、指導方法の工夫・改善を中心に、授業改革の推進に努めることにした。そこで、図1のようなP D C Aサイクルによる評価活動を取り入れ、仮説を検証することとする。

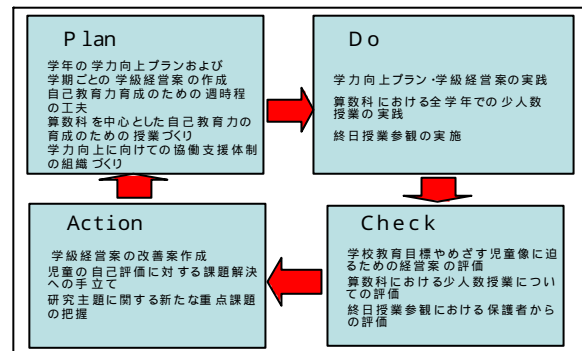


図1自己教育力育成のためのPDCAサイクル図

## 5 研究の実際

(1) Plan段階の内容

ア 学年の学力向上プラン及び学期ごとの学級経営案の作成

学級経営案を考える際に、学校教育目標と学年・学級目標との系統化を明らかにした上で、学年ごとの学力向上プランを立て、学力向上への指導の重点を設定した。学力向上プ

ランについては、「繰り上がりや繰り下がりのあるたし算・ひき算が指を使わず5分以内で36問が解答できるようにする」等、具体的な数値目標をあげるよう指導助言した。

また、学級経営案には、学年の学力向上プランを受け、学級での学力向上への取り組みを明記するとともに、従来の年間1枚の羅列的な学級経営案を見直し、評価を生かしながら指導できるように、学期ごとの構造化した学級経営案になるよう工夫した。なお、担任外の加配教員（指導方法工夫改善・児童生徒支援）や養護教諭も経営案を作成し、全職員がそれぞれの分掌で、学校教育目標の具現化を意識できるようにした。

### イ 算数科を中心とした、自己教育力の育成のための授業づくり

平成15年度より研究主題「分かる喜び、できる喜びを感じ、自ら考える子どもの育成」を掲げ、テーマ構想図（図2）のように「少人数授業を重視した授業プランの工夫」を研究2年次の重点課題とした。また、「日常指導の重視」による学習の基盤づくりとして、「話す・聞く」指導やノート指導の充実、「家庭との連携」による家庭学習の習慣化や基本的生活習慣の定着をめざすこととした。

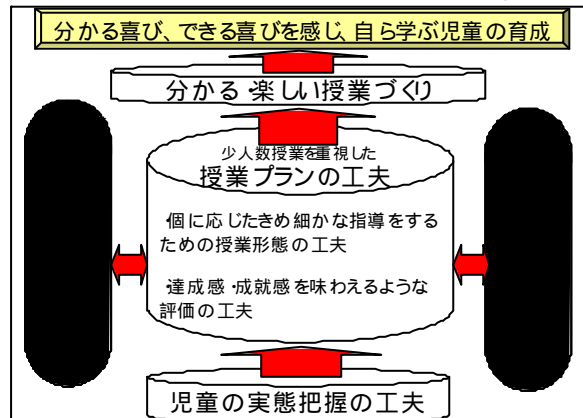


図2 テーマ構想図

### (2) Do段階の内容

ア 学力向上プラン・学級経営案の実践  
第1学年では、「繰り上がりや繰り下がりのあるたし算・ひき算を指を使わず5分以内で36問できるようにする」を学力向上プランの目標に掲げた。1学年1組担任および指導方法工夫改善加配教員の2学期の学級経営

案に、たしざん(2)、ひきざん(2)の取組についての指導の視点を明記し、それに基づいて授業を実践した。

### イ 算数科における全学年での少人数授業の実践

平成16年度は、全学年で少人数授業を実施した。協働支援体制の取組として、教務主任が支援した第1年生の「たしざん(2)」では、事前調査の結果から学年を3つの習熟度別の少人数（「どんどんコース」「じっくりコース」「チャレンジコース」）に分け、さらに、C段階の児童が多い「チャレンジコース」には、教務主任が入りT・Tで取り組んだ。各コースとも児童の実態を分析した上で、指導の重点を決め、授業プランに沿ってきめ細かな指導を行った（資料1）。

#### 資料1 たしざん(2)少人数授業の各コースについて

	児童の実態	指導の重点
チャレンジコース(C)	・人数は、12名 ・2～9までの数の分解を指などを使ってすることはできるが、反射的に答えることは難しい。 ・10の補数について、即座には言えない児童も含まれている。	・10のまとまりにしたらずに数がかかること、あといくつ持ってきたら10になるかを電車ごっこや卵パックの詰め込み作業などの体験的な活動を通して理解の定着を図る。 ・よりきめ細やかに指導するために、T・Tで取り組み、被加数に応じて1時間ずつ、スモールステップで進める。
じっくりコース(B)	・人数は、16名 ・2～9までの数の分解がほぼできているが、すばやく答えることができる児童と、答えるまでにやや時間を要する児童がいる。	・計算方法を作り上げるまでの時間を十分に設け、ブロック操作で答えを見つけた計算の過程を言葉で言い表しながら書く作業を繰り返し、計算方法の定着を図るようにしていきたい。 ・毎時間の始まりに復習タイムを設けて繰り返し練習を行う。
どんどんコース(A)	・人数は、18名 ・10の補数、2から9までの数の分解、答えが10以下のたし算、「10といくつで十何」については、ほぼ理解している。 ・全員の児童が正しく計算の答えを出すことができる。	・10の補数を利用した計算方法をしっかりと身につかせ、数図ブロック等の半具物体はあまり使わないで念頭による数の操作で計算ができるようにさせる。 ・たし算カードを使ったゲーム、問題づくり、それを解き合う活動、パソコンを使った学習を取り入れながら、計算の習熟を図る。

### ウ 終日授業参観の実施

本校では、「開かれた学校づくり」をめざし、年に2回、保護者が児童の1日の学校での様子を参観する「終日授業参観」を実施し、学校の取り組みを理解していただくとともに、授業中や学校での児童の様子についてアンケート（外部評価）を行い、授業改善につなげるようにした。

### (3) Cheek段階の内容

ア 学校教育目標やめざす児童像に迫るための経営案の評価

(ア) 学級経営案の自己評価

学期末に、自分が立てた評価項目に沿って

自己評価を行い、グラフ化させた。評価の低かった項目については、より具体的な指導の手立てや児童の行動目標を明記し、評価項目を具体化・焦点化することで、指導の視点を明確にするよう指導助言を行った。

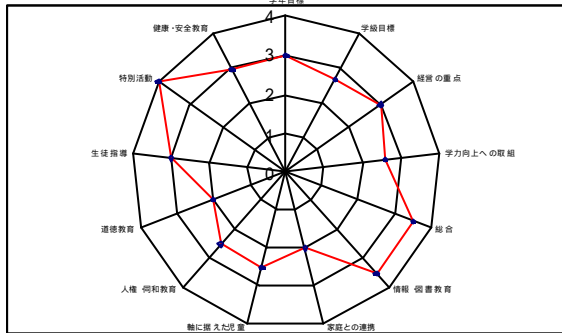


図3 1学期学級経営自己評価の例

(イ) 共通の評価項目についての児童、教師の自己評価の実施

学習面・生活面で学校全体として共通理解をして取り組んでいることについて、児童・教師に同一の評価項目を作成し、学期末に自己評価を実施した。その結果より、自己教育力に関する「自力で考える」「ノートに学習したことをきちんと書く」についてが80%を超えており、算数科を中心に「自ら考え、自ら学ぶ子ども」の育成に努めてきたことへの一定の評価が得られる。しかし、「話す・聞く」指導や「家庭学習」については80%に達しておらず、課題が残っていると言える。

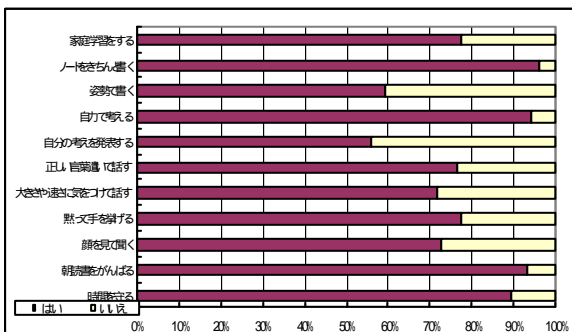


図4 H16年2学期児童の自己評価(学習面)

イ 算数科における少人数授業の評価

(ア) 1年生「たしざん(2)」の実践

1年生の習熟度別少人数授業を行った「たしざん(2)」の単元末のテストでは、どのコースも全国平均を上回っており、個に応じた指導を行うことができたと言える。しかし、

問題別の正答率を見た場合、計算に関しては高い値を示しているが、文章題での正答率が低い。今後は、問題づくりなど児童に考える場を保障するとともに自力解決の場をより工夫する必要がある。

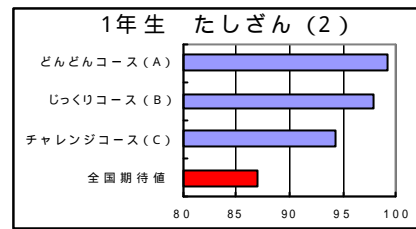


図5 単元末テスト結果

(イ) 算数科に対する意識調査の変容

平成15年4月、平成16年2月、12月と算数科学習に対する意識調査を3回行った。算数の授業について、「大変楽しい」「楽しい」と答えた児童の割合が、平成16年12月では平成15年4月より約10%アップした。算数の授業の楽しかった理由について、「自分で考えた」「少人数で取り組んだ」が大幅に増えていることがわかる(図6)。このことから、児童の実態を考慮しながら、操作活動や少人数授業を授業プランの中に取り入れたことなどで、児童に、「自ら考える」楽しさを味わわせることができてきたと言える。

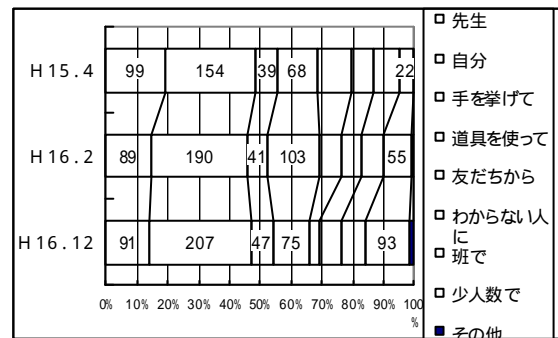


図6 算数の授業が楽しい理由の変容

ウ 終日授業参観における保護者からの評価

終日授業参観では、日常指導の充実という点から全教職員で取り組んでいる「聞く・話す指導」「姿勢」「あいさつ」等の9項目の児童の様子について、外部評価として保護者にアンケートを行った。保護者のアンケート結果(図7)から、平成15年10月に行ったときに評価の低かった「聞く」態度が78% 93%、「話す」態度が58% 98%

に向上しているのがわかった。これは、保護者の外部評価を受け、学校全体で、「聞く・話す」指導について見直し、重点的に指導したためと考えられる。このように学校を開き、外部評価を受けることは、教師の指導を見直し、資質の向上をめざす機会となると言える。

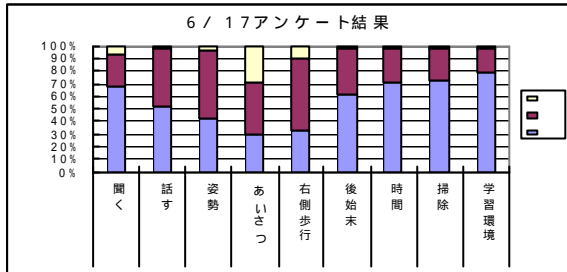


図7 終日授業参観での外部評価結果

(4) Action段階の内容

ア 次学期の学級経営案の改善案作成

学期末の自己評価を分析し、改善点を明確にしたうえで、次学期の学級経営案を作成させた。

資料2 A教師の学級経営案の反省および改善点

1学期反省	『聞く・話す』活動の『話す』について活動の工夫がなかなか身に付いていないところがある。高学年の課題『表現力』をもっと鍛えていきたいと思う。 学習・生活全般にわたって、問題解決力をつける活動の工夫が足りないと思う。
主な改善点	日々、学級や学年で『話す・聞く』指導を行う。1学期のディベート学習の成果を生かし、根拠をもとに自分の考えを話したり、大事なことをメモをとりながら聞いたりする。(話す・聞く指導) 身の回りの問題を自分たちで見つけ話し合い、解決していこうという意欲・態度を育てる。授業の中に自分の考えをもつ時間を保障するとともに、ノートに自分の考えや問題解決への見通しを書かせる。(問題解決力の育成)

イ 研究主題に関する新たな課題の把握

(ア) 学習したことを確実に定着させるための手立て

算数科において、「少人数授業を重視した授業プランの工夫」を重点課題とした結果、単元末のテストでは、どの学年も習得率がかなり上がっていることが分かった。しかし、学期末の計算力実態調査では、単元終了時にはできていた問題が解けていないこともあり定着の面での課題が残った。今後は、学習したことを確実に定着できるよう、定期的に定着テストを実施したり、家庭学習の在り方を

工夫したりする必要がある。

(イ) 交流活動を活発にするための手立て  
自己教育力の育成に関して、児童に自己評価をさせたが、その結果より、平成15年度に比べると、どの項目も伸びてきていることが分かる。しかし、「話す・聞く」活動に関しては、80%を超えておらず、問題解決場面での交流活動に課題があることが伺える。今後は、話し方・聞き方のモデルを示しながら継続的に指導したり、授業場面で考える場を保障したりするなど、問題解決力を育てる授業づくりを工夫していきたい。

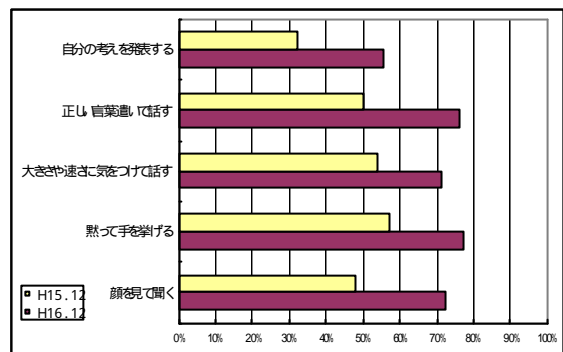


図8 児童の自己評価による自己教育力の変容  
6 研究の成果と課題

(1) 成果

「よく考え、すすんで学ぶ子ども」(自己教育力の育成)という重点目標を設定し、学級経営案の中に具体的な取組の手立てや数値目標を明記したことで、標準学力テストの結果が、約2ポイントアップできた。

P D C A サイクルを大切に評価活動によって、学校教育目標に対して、見通しをもち、継続的に取り組むことができた。

担任だけでなく、担任外も経営案を書き、全教職員で学校教育目標の具現化をめざしたことで、学校総体としての協働支援体制を充実することができた。

(2) 課題

学校目標をより具現化するために、学級経営案の項目立てを検討し、それぞれの関連化を図る。

質の高い授業へと授業改善するために、教師や保護者等による内外の評価活動をさらに充実する。

